

第九回公演・動画解説資料

寿式三番叟付五人囃子

(解説資料)

2016年9月9日、13:30～14:00まで。約30分間の里神楽映像です。

祭りで、垣澤社中が里神楽を奉納するとき、まずはこの演目(曲目)でスタートしています。「神楽三番」と呼ぶようで、舞台(神楽殿)を清めること、喜びを意識して演じている、とのこと。年明けの能舞台での「翁」、歌舞伎でもすっかりお馴染みの三番叟ですが里神楽では、五人囃子が登場する演出が特徴だと思います。儀礼的な曲目だから厳かに、と思うわけですが、賑やかで思わず笑ってしまう演出が用意されているので、楽しい気分になります。

江戸里神楽公演学生実行委員会では、デジタル・オーディエンスを対象に神楽公演動画を、試験的にウェブにアップしました。なお、デジタル・オーディエンスと表現したものの、江戸里神楽、相模里神楽に少しご関心がある方々という限定的な皆様に対する解説内容になっているので、アップ後に加除訂正を含めて、追記していくことになる、そう思っています。

○鑑賞のチェックポイント

舞が二つ。舞の神楽と考えていいでしょう。悪霊退治を意識して、舞台の四方を清める「地固めの舞」と天下泰平・五穀豊穰を願う「喜びの舞」が用意されています。地固めの舞と喜びの舞の間に、登場する五人囃子の舞台は楽しいです。

○舞台の流れ

01: アシライ・大拍子のアシライから、はじまります。続いて、王管(おうかん)による乱拍子(らんびょうし)となります。王管とは、おそらく能管(のうかん)が相模で変化した呼称と理解していいでしょう。

02: 乱拍子で、三番叟が登場となります。登場したら、神前(しんぜん)で一礼。

ここまでが、いわゆる出端(では)と呼ばれます。

03：ここから、地固めの舞に入ります。舞台の四方を払って清めていく、というふうに理解してください。足を踏む、力強く踏む。舞うという表現よりも踏むという表現の方が適切です。

04：終わると、下がり端という神楽囃子が演奏されます。五人囃子の登場です。舞台が五人囃子（いわば、囃子の演奏グループ）の登場で賑やかになります。

五人囃子の登場、これを五人囃子の出端（では）と言います。神楽囃子の曲目は、陽気で明るい雰囲気（いんば。埼玉ではニンバと呼んでいます。）が演奏されています。

05：命令の場面です。三番叟が五人囃子に対して、「私はこれから、喜びの舞を舞うから、お囃子を演奏するように」と伝えます。この場面での神楽囃子は昇殿（しょうでん）という曲目です。

06：いよいよ、波の華（塩の意味）を撒いて、舞台四方を清めます。二礼二拍手一拝所作を入れて波の華を撒いていきます。下がり端が演奏されています。

07：三番叟の衣裳に注目してください。千早に大きな鶴が描かれています。大きな袖をさばく所作を「袖さばき」といいます。

08：袖さばきが終わると、「口書き」に入ります。口書きとは、顔全体を筆のように動かして、舞台の床面（砂が敷いてある、とイメージしてください）に文字を書く所作の意味です。「寿」と書く、あるいは「大入り叶う」と書きます。私たち実行委員会の公演であれば、入場料を取っての興行ですから、「大入り叶う」を願います。

09：砂文字を袖で集める所作があります。そして、謡をはじめます。この謡のあいだ、神楽囃子は演奏されません。

　　ゝおおさいおおさい　喜びあり　喜びあり　我が思うところの喜びは、他へはやらじと思う

10：三番叟の喜びの舞がはじまります。五人囃子が持つ楽器は、笛、太鼓、鼓、鉦（ヨスケと呼ばれています）、拍子木（木頭と呼ばれています）。三番叟を囃し立てる場面です。神楽囃子は、とつぱ。笛は、王管が使用されています。

三番叟の舞は、舞うというよりも踏むという表現がふさわしい。「三番叟を踏む」という表現が社中で確認できます。両足で舞台を踏む回数は、めでたい数字で、七五三（しちごさん）。これで、悪霊も鎮められていきます。舞台を踏む所作がこの舞の見どころとなっています。

千早の袖さばき、種を蒔く所作、めでたい鶴と亀の動きを想像させる所作などが発見してもらえれば、演者も喜ぶでしょう。

11：三番叟が五人囃子のメンバーを上手に紹介していきます。神楽囃子の笛はとつぱが演奏されていますが、印場に聞こえてきます。

12：いよいよフィナーレとなります。最後の見どころ、鳥飛び（からすとび）が三番叟によって、演じられます。「鳥飛びなくして三番叟なし」です。

神楽囃子は、激しい雰囲気伝える早（はや）が演奏されご神前の前にて、飛んで一礼となります。

13：三番叟は、席に座り〈見送り〉場面に移ります。神楽囃子は昇殿が演奏されます。五人囃子の人たちにとっては〈引っ込み〉の場面になっていきます。見送りでは昇殿が演奏され、やがて、引っ込み場面ですから五人囃子の出端で印場が演奏されたように、印場の演奏で踊りながら帰っていきます。役目を無事に終えてホッとした気持ちが舞台から溢れてきます。

14：五人囃子の帰りには、神前のお酒を持ち帰ります。「三番のお神酒」（さんばのおみき）と言います。このお神酒、楽屋に戻ると神楽師が「本日の神楽が無事に務まるように」とうことで乾杯となります。お祭りをお祝いする神楽師の気持ちが理解できます。このお酒、とびつきり縁起がいいお酒なのです。

15：五人囃子が引っ込んだ後、三番叟も引っ込みの準備にかかります。神楽囃子は下がり端となります。そして、いよいよフィナーレ、三番叟の引っ込み

です。乱拍子が演奏されるなか、付板が用いられ、歌舞伎の六方を見ることができます。

なお、乱拍子の演奏ですが出端の乱拍子と違って、ゆっくりした気分で演奏されています。無事終了の気持ちを感じられます。

○三番叟の装束（身軽さ重視）

・三番叟はどの芸能でも大抵同じ装束だと思います。直垂と呼ばれる装束の表着（うわぎ）には、背中に鶴が翼を広げた絵柄が施されています。能や歌舞伎では黒地の正絹に金糸を用いた刺繍で描かれているようで重たい感じがします。直垂とは上下セットの装束なので、下も黒地に金糸刺繍です。

・千早の下には赤い二引半着付（にひきはんきつけ）を着用します。垣澤社中では身軽さを重要視し、垣澤純子さん（家元の奥さん）の発案で大漁旗の染色技法で作りました。

昔は神楽師が手描きで鶴を描いていたそうです。垣澤社中では表着を千早（ちはや）と呼んでおり、下は切袴を用いています。足袋は以前は白足袋でしたが、他の芸能の様子を取り入れ、最近はウコン足袋を用いています。

・烏帽子は剣先烏帽子（けんさきえぼし）。山頂が剣の先に見えるから。毛は黒かききを用います。毛は半紙と水引でまとめます。

○基本データ

第九回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演 会場撮影

出演団体 相模里神楽 垣澤社中（神奈川県厚木市酒井）

公演会場 さいたま芸術劇場小ホール（さいたま市中央区）

主 催 第九回江戸里神楽公演学生実行委員会

開催期日 2016年9月9日（金）

撮影編集 イナヴォイス若葉会（会長 葭谷 昭）

UP 協力 葭谷 昭

写真撮影 ソニオンフォトクラブ有志（会長 辻田勝裕）

参考資料 『第九回楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演解説プログラム』

（2016年9月9日刊行）

出 演 者 式三番叟 垣澤 良

五人囃子 垣澤謙治 中山敏男 白井良子 塩川一美 石渡 勇

囃子方

大拍子 垣澤 勉

笛 垣澤瑞貴

太 鼓 大貫恒文

足 木 垣澤純子

*着付 高見進 坂本舞 小西浅美

○公演協賛会社等

有限会社望月商店 有限会社ドックラスター 株式会社フミテック 株式会社大丸衣裳店 有限会社とらや 整体リラクワ表参道 株式会社ベル・アンファン 白石真弓染色アート学院 JA あつぎ厚木市農業協同組合 湘北短期大学 株式会社程島商店 有限会社豆庄 株式会社福田建具 共栄建設株式会社 岩槻人形協同組合 薄井崇宏

○追記・垣澤社中の功績

第九回公演、私たちは神奈川県厚木市酒井から、相模里神楽 垣澤車中をお招きしました。私は、そのことの大変さを伝えるとき、出演者のスケジュールをまず伝えることにしています。公演当日、午前6時30分に本厚木駅に集合して、6時46分発の「さがみ68号ロマンスカー」に乗車してもらい、なんとか午前9時前にさいたま芸術劇場（新宿駅経由で埼京線与野本町駅下車）にお越しいただいた、という事実です。

演じ手さんは、それから支度をして、リハーサルへ。朝食も昼食も慌ただしく（もちろん、夕食も慌ただしい）打ち合わせをしながら、着付けに入らないと間に合いません。序開きの「寿式三番叟」からフィナーレの「寿獅子舞」までの一日は、脱いでは着付けの連続ですから本当に修羅場だったと思います。

9月9日の前日、つまり8日ですが厚木の家元の家から神楽衣裳その他の神楽用具を積み出して、午後3時過ぎには二台の自動車ですべて劇場まで運び込んでいます。小ホールは舞台裏付近で開梱して、衣裳・道具の確認をしておられました。道具に忘れ物があったら、アウトですから懸命な確認作業がありました。

立ち会った一部の学生スタッフは、その後、劇場内で明日に向かってのミーティングを開催されていました。

9日の午後8時。終演後、お客さんをお見送りしてから片付けに入り、レンタカーに積み込むまでの時間がおおよそ1時間余でした。さすがに、舞台を終えて、片付けて、厚木まで運搬するのは、無理。疲労困憊の状態ですから危険。そこで、垣澤父子のお二人が劇場近くに宿泊して翌朝、厚木に戻って行かれた幸いです。

私達も翌朝には劇場にて、プログラム、チラシなどの残部を小さな日産マーチ・神楽号に積み込み、そしてレンタルしていたスクリーンとプロジェクターの搬出準備に追われていました。

こうした慌ただしい三日間を過ごしますと、頭の中には「たどりついたら、いつも雨降り」という鈴木ヒロミツの歌が入ってきます。確かにこのボランティア公演は、負担度が高くて未来がないブラック活動。本当に、未来が描けない公演事業だと思いながら、この歌のイントロのフレーズを繰り返しつつ、休息に入っていきます。9日、舞台のご神前に供えられていた「七代」という銘酒を味わいつつ、夢の中へ入っていきます。〈三番のお神酒〉ですから、縁起がいいお酒。

こうして、動画を再生しながら、デジタル・オーディエンスという未知の方々
に何をお届けすることがいいのかな、と考えますと、「あらゆる困難を克服して、
垣澤社中の皆さんが公演にご協力してくださった」という事実をお伝えしたい
と思いました。相模の神楽師魂をお伝えすることだと思いました。

(構成・文責 江戸里神楽公演学生実行委員会)